

- 1 学 年 第4学年（R4年度引佐北部小学校）
- 2 教 科 学級活動（書評合戦「ビブリオバトル」で伝える力をつけよう）

3 実践内容

①本校児童の課題

本校児童は、自分の思いや考えをはっきり分かりやすく伝える「発信力」に課題があるとわれ続けている。それを鍛える活動のひとつとして、ブロック（本校独自の複数学年のまとまり）ごとに行う「スピーチ集会」がある。スピーチ集会は月1程度のペースで開催され、大勢の前（4年生が所属する初等部は30名程度）で最近頑張っていることや思い出に残ったことなどを発表する。子供たちは30人の前に出る緊張感もあってか、4年生でも声が小さくなったり、予め考えておいた内容を早口で話して終わってしまったたりしている。そこでスピーチ集会とは別に、おすすめの本を紹介し合って勝負をする「ビブリオバトル」の活動を、学級内で取り入れていくことにした。

②ビブリオバトルとは

ビブリオバトルは、自分が人におすすめしたい本を紹介し合い、読みたくなった本に投票をし合って勝敗を決めるゲームで、10年ほど前から全国に普及し始めた活動である。近年は全国大会が開かれたり、教育活動に採り入れる学校が出てきたりしている。本の紹介の仕方は自由だが、発表原稿を用意しないことや、途中で話すことがなくなっても制限時間いっぱいまで紹介を続けることなど、ゲームとして一定のルールがある。

③子供たちの活動

活動にあたって、まず教師が手本となって本のプレゼンを行い、子供たちには観客として投票を行って、ビブリオバトルの流れを掴ませた。ビブリオバトルには大勢を前にして行う「イベント型」と少人数で行う「コミュニティ型」、多人数を小グループに分けて行う「ワークショップ型」と形式があるが、まずは少人数で発表がしやすい「ワークショップ型」を行うことにした。

初回、子供たちは意気込んで臨んだものの、いざ話し続けるとなると途中で沈黙してしまったり、同じことを何度も繰り返すだけになってしまったりして、子供たち自身が課題を感じ取ることになった。また、プレゼンのあとに必ず「質問タイム」が設けられるのだが、本の内容や紹介者の思いを知るためには、その時間がとても大切になると気づき、聞き手としていかによい質問をするかにも意識が向けられるようになった。

2回、3回と活動を繰り返すと、課題として挙がっていた点が徐々に克服されてきて、しっかりと本を読みこみ準備をした上で臨む子や、身ぶり手ぶり、冗談を交えながら紹介をする子が出てきて、活動に盛り上がりが見られるようになった。紹介内容にも変化が見られるようになり、物語のあらすじを追うだけでなく、面白い表現に着目したり、じっくり紹介したいページを選んで話したりする子が出てきた。また、クイズを採り入れたり、聞き手に質問をしたりしながら話す子も表れ、質問タイムと併せて、だんだんと「本の紹介スピーチ」から「本を通したコミュニケーション」へと活動の様子が変化してきた。



④「イベント型」への挑戦

活動に慣れてきたところで、大勢の前で発表する「イベント型」にも挑戦してみることにした。聞き手として1～3年生の下級生に協力してもらい、それぞれの学年に合わせた本を選んで、ビブリオバトルを行った。

教室の中ではわいわいと楽しく活動できるまで本の紹介に慣れた子供たちだったが、数人とはいえ下級生の前に出て話すと緊張感はワークショップ型の比ではなかったようで、お世辞にも上手にできたとは言えないものになった。子供たち自身も課題を感じたようで、伝えたいことを伝えきれなかった、下級生は聞き取りづらかったと思うなど、反省の言葉が多く出てきた。そして、もっと人前で話すことに慣れていかないといけない、伝えたいことが伝わらないのはもったいないと、今後に向けてやる気を出す姿が見られた。



4 成果と課題

コミュニケーションの必要感や面白さを感じ取り、自分を成長させたいという思いが出てくるようになった点は評価できる。話すこと・聞くことは学習の基本であるが、意識や気持ちによって表れが大きく変わるので、心の面から鍛えていきたい。